

きらきらとまばゆく、もやもやとくすぶる、
ティーンエイジの誕生。

門間雄介

これは「ティーンエイジ」と称されるあの輝かしい季節に焦点を当てたドキュメンタリーだ。ティーンエイジとは一般に13歳から19歳までの青少年少女たちを指す呼称だが、かつてそのような年代区分は存在しなかった。まず子どもがいた。次に大人がいた。大人になる前のまだ何者でもない時間は、かつて誰にも許されていなかった。なぜなら子どもは大人の手として足として、つまり労働力として、すぐさま社会へ放り込まれたからだ。しかし子どももよりたくましく、大人と呼ぶにはまだ青く透きとおった時代は、やがてそこにしかない価値を見出されていく。『ティーンエイジ』は20世紀前半、1904年から1945年までの間にその年代の青少年少女たちが直面してきたことを取りあげ、ティーンエイジという概念が生まれた背景を明らかにする。例えばフランスの歴史家、フィリップ・アリエスに『(子供)の誕生』という著作があった。中世ヨーロッパには「子供」の概念がなく、7歳、8歳までの子



どもたちはまるで「動物」のように手荒く扱われていたという。そんな「動物」たちが子どもと見なされるようになったのは、17世紀以降、近代的な学校教育制度が整備されてからだ。『(子供)の誕生』がそういった歴史を掘りさげたように、『ティーンエイジ』はティーンエイジの誕生を歴史の中に位置づけようとする。ティーンエイジャーは戦争の発明品だ——本作のポイントはなによりここにある。冒頭で触れられるのは1890年代、イギリスの街中で犯罪に手を染めた労働者階級のごろつきたち、いわゆるフリーガンについてだ。かの国の行く末を案じたロバート・ベーデン・パウエルは、陸軍大佐として若い兵士に向けて書いた手引書が青少年教育に役立つと考え、1900年代初頭に『ボーイスカウト』を組織する。スカウトが斥候の意味であることからわかるように、それまで労働

それぞれ違った多様な女の子たちを祝福し彼女たちの力を祝福していること、それに加えて女の子同士の友情の大切さ、どうやったら私たちはたがいを強くしあえるかを伝えていくことだ」と述べている。映画を観てからこの発言を読むと大いに腑に落ちるし、本当に原作とは違うところを指摘しているのだなあとつくづく思う。あるいはまた、小さな町を舞台にした少女たちの物語という限りでは同じであれ、ソフィア・ Coppola監督の『ヴァージン・スイーズ』(1999)などもまったく違っている。『ヴァージン・スイーズ』の方がはるかに洗練されていて予算も潤沢そうなので、つい『シスターフッド・オブ・ナイト夜の姉妹団』に味方したくなるが、もちろんどちらにもそれぞれのよさがある。

ただまあ、SNSの暴力(これまた原作には登場しない要素である——無理もない、原作は1994年発表なのだから)を使ってストーリーを動かしているあたりは、早くもありきたり感が出てしまっていて、個人的にはあまり共感できない。とはいえ、今日び学園映画を作るとしたら、FacebookだのLINEだの抜きでやるのはもう不可能なのだろうなあとも思うが……まあそのあたりのことは、62歳、携帯電話所持の人間があれこれ考えても仕方ない。もう十分、余計なことを言わずに済ませよう。

ひとりが、感じるままに観ていただければと思う。

ちなみに『シスターフッド・オブ・ナイト夜の姉妹団』には原作者のステイヴン・ミルハウザーが、生徒たちをオーディションする演劇部顧問の教師役でカメラオ出演している。大半の人には「それがどうした」という話だろうが、一部のミルハウザー・ファンには嬉しいプラスアルファにちがいない。



★3

「ヴァージン・スイーズ」
監督：ソフィア・ Coppola
脚本：ソフィア・ Coppola
原作：ジェフリー・ユージェニデス
撮影：エドワード・ラックマン
音楽：エール
キャスト：キルステイン・ダンス、
ジョシュ・ハートネット、ジェームズ・
ウッズ、キャスリーン・ターナー
1999/97分/アメリカ

柴田元幸(しばた・もとゆき)

翻訳家、東大文学部特任教授。
ポール・オースター、ステュアート・ダイ
ベック、ステイヴ・エリクソンなど
現代アメリカ作家の翻訳多数。著書に
『死んでいるかしら』(日経文芸文庫)
など。雑誌『MONKEY』(スイッチ・
パブリッシング)責任編集。

★3

「ヴァージン・スイーズ」
監督：ソフィア・ Coppola
脚本：ソフィア・ Coppola
原作：ジェフリー・ユージェニデス
撮影：エドワード・ラックマン
音楽：エール
キャスト：キルステイン・ダンス、
ジョシュ・ハートネット、ジェームズ・
ウッズ、キャスリーン・ターナー
1999/97分/アメリカ